

現3年生の就職ガイダンス いよいよ 本格始動!



今年度も厳選採用がづく

現在、日本経済の回復基調とともに、雇用環境においても改善の兆しが見え始めています。しかし、今年度も企業はより優秀な人材の確保をねらい、多くの企業が厳選採用を予定しています。最近の採用傾向は、春採用のほかに秋採用、通年採用と多様化の傾向が一段と激しくなっています。また、雇用形態においても、契約社員、臨時社員、派遣社員など様々な雇用の形態がとられています。そのため、雇用の改善とは裏腹に、春入社の新卒正規社員の採用が大幅に増大する事は期待できません。

本学においては従来、一般事務職について各企業から高い評価を受け、その

求人件数は現在3000社を越えています。また、最近では男子学生はもちろん女子学生においても総合職・準総合職(エリア職)にチャレンジする学生も増加しており、昨年度就職状況でも大手・中小企業に総合職として入社した女子学生割合は伸びています。

低学年次からのキャリア教育

進路支援センターでは、3年次からの就職支援において、年度始めの6月から翌年2月まで就職支援ガイダンスや各資格取得講座、業界・業種理解講座、各就職セミナー、内定者活動報告会、企業説明会、インターンシップなど積極的に取り組んでいます。今年度からは、

さらに1・2年次の就職ガイダンスの強化を図り、1年次の6月からキャリア教育(職業に基づき自己の人生のあり方を探る)を実施し、低学年次から職業に対するモチベーションを高めるプログラムを導入し、学生の職業観、勤労観の高揚を図っています。

大学教育が就職活動能力育成の基本

学生は大学教育において幅広く深い教養、高い倫理観に裏打ちされた専門教育のなかで、自己の学問的素養を涵養し、真の意味で社会に活かせる基礎力をつけ、同時に企業で重視される課題発見能力、問題解決能力、コミニ

ケーション能力、論理的思考能力を養うことが期待されています。今年度も、いよいよ現3年生の本格的な就職ガイダンスが始まります。進路支援センターでは、自己分析からエントリーシート・履歴書の書き方、面接・マナー指導などの実践的プログラムを学生に提供し、また、3年生就職希望者全員に個別面談を実施し、就職活動に向けた心構え・活動に対する質問などの相談に応じます。これまで学んだ教育を基礎に、実践的な就職活動能力を身につけることを期待します。そして、来春には晴れて、皆が希望の職業に就けるよう進路支援センターは学生を支えていきます。

(進路支援センター)

夕焼けとタイガ



文化創造学部教授 清水良典

十一年以上前にメキシコ北西部ソノラ州のエルモシージョという砂漠の真中の町でクリスマスから新年までを過ごした。五人家族の家でのホームステイである。英語さえ怪しいのに、ス

ペイン語「Gracias」「Adios」しか知らない状態で、マシンガンのようなスペイン語の雨嵐のただなかに飛び込んだのだ。赤ん坊同然なので自分と歳が変わらないホスト両親をババママと呼んでいた。それでもオウム返しにしゃべっているうちに三日たつと片言くらいは分かるようになってくるから人間の言葉の力は不思議である。実年齢は中年のオヤジなのに気分は十代の少年のように若返って、連日テイスコやパーティーに出かけまくっていた。カルメンというボタタ可愛い娘(と仲良くなつて手をつないで散歩したりしたものだが、あとから彼女が十七歳と知って驚いた)だつて車を運転していたのだ。七年後に町を再訪したら大きなキルルがあちこ

ちにできていて、すっかりアメリカナイズされていた。カルメンも結婚してアメリカにいたという話だった。でもテキーラの味と、カリフォルニア湾に沈む壮大な真赤な夕焼けは変わらなかった。

がらりと風土の異なるロシアの極東で越年したこともある。ウラジオストクから車で北1時間ほどのウリースクという小さな町だ。以前日本でお世話をしたことがある年配のロシア人の家を訪ねたのである。ロシアでのホームステイは一度目だったので、片言のロシア語でも不自由しなかった。しかし何せ厳冬のシベリアである。「わりとあったかい」という日でも零下20度くらいなのだ。滞在なかばに息子夫婦の家(い)しよに、タイガ針

葉樹林の森へ「ピクニック」へ連れて行ってもらったことがある。森の中の道端に虎の絵の看板があった。アムール虎の棲息地域なのだが、みんな平気である。すっかり歩き疲れて凍えたあと、焚き火を起して暖をとった。長男のイゴールが、白いラードの塊をナイフで切つて、枝に刺して渡してくれた。それを火にあぶる。音を立てて脂が滴り落ちるのを「うふうう」息をかけたながら口に運び、ウオツカをおおる。たちまち冷えた手足の先まで生命の温みが貫き通った。

メキシコではテキーラが、ロシアではウオツカが、やはり似合うのだ。一つの対極に離れた場所を、深夜焼酎を飲みながら、ときどき故郷のように思ひ出す。

随想